

横浜市インフルエンザ流行情報 13号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

報告数は減少していますが、依然として警報発令中です。

【概況】

横浜市全体の第7週(2月12日～18日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、**23.50**となり、減少に転じた第6週の48.15^{※2}より、さらに減少していますが、依然として流行警報発令中であり、引き続き注意が必要です。

年齢別では、15歳未満の報告が全体の65.1%となって第6週までと比べてやや減少し、成人の割合が増加しています。また、学級閉鎖等の報告件数は、減少に転じた第6週よりも第7週はさらに減少しましたが、高齢者施設での集団発生報告は続いています。市内基幹定点^{※3}からのインフルエンザ入院患者の報告は続いており、10歳未満と70歳代以上の報告が多いため、重症化には注意が必要です。

迅速診断キットの結果は、第7週で **A型 21.9%、B型 77.9%**と、B型が多く報告されています。例年と比べてB型の流行が早いため、一度B型にかかったことがある人がA型にも感染したり、A型とB型に同時にかかる可能性もあり、注意が必要です^{※4}。

今後も引き続き、正しい手洗い^{※5}等や、咳が出る時のマスクの着用及び早期受診などの対策^{※6}が重要です。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

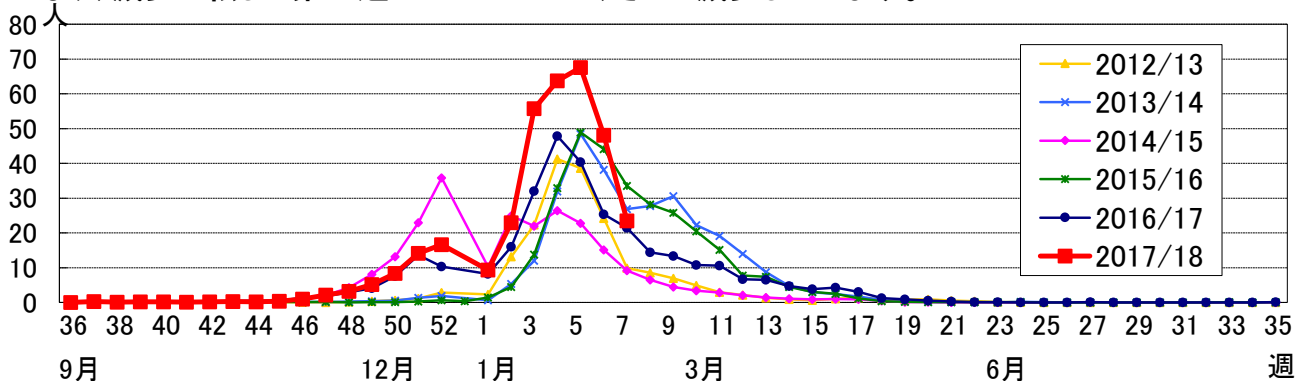
※3 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

※4 [2017/18シーズンの山形系統のB型インフルエンザ流行状況—横浜市](#)

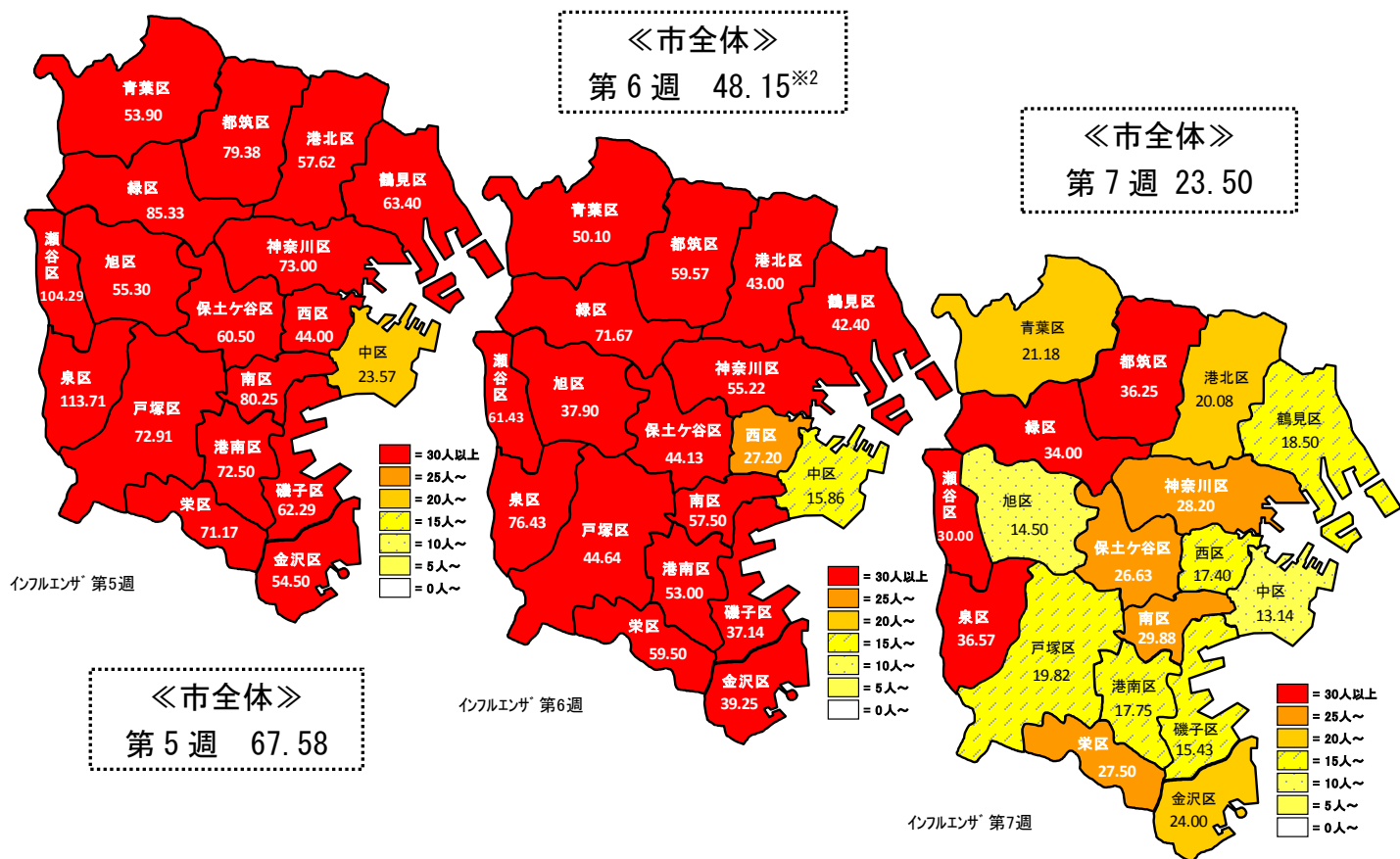
※5 [横浜市保健所ホームページ](#)(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご活用ください)

※6 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第7週(2月12日～18日)で23.50となり、減少に転じた第6週の48.15^{※2}から、さらに減少しています。



2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)

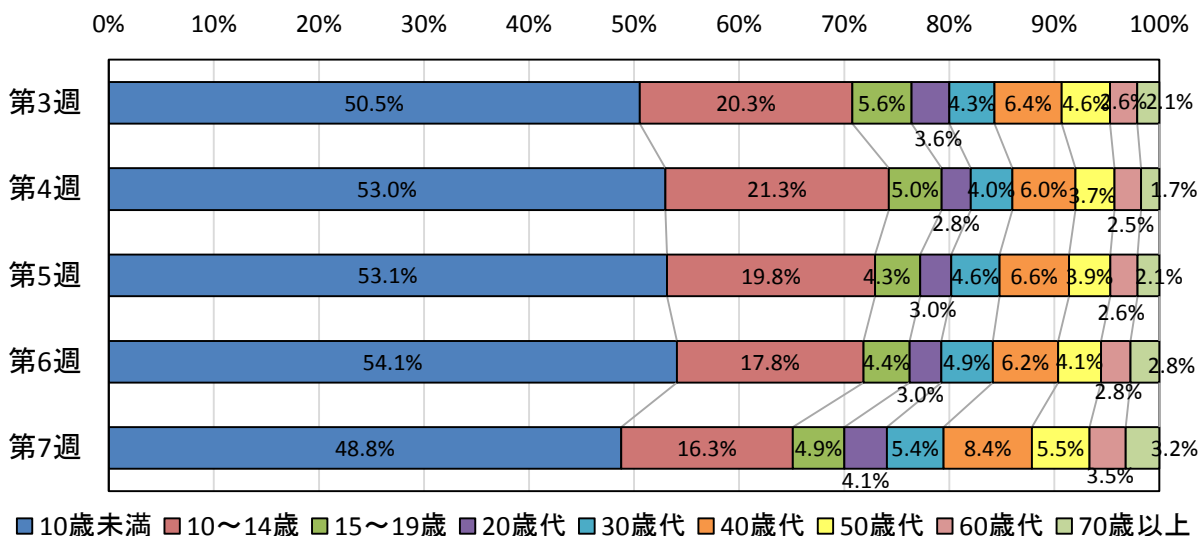


第 3 週にて、市内全体で定点あたり 30.00 を超えたため、流行警報が発令されています。流行警報は、警報継続基準値（10.00）を下回るまで続きます。

昨シーズンは第 3 週に定点あたり 32.23 にて流行警報が発令され、第 12 週（2017 年 3 月 20 日～26 日）に解除されています。

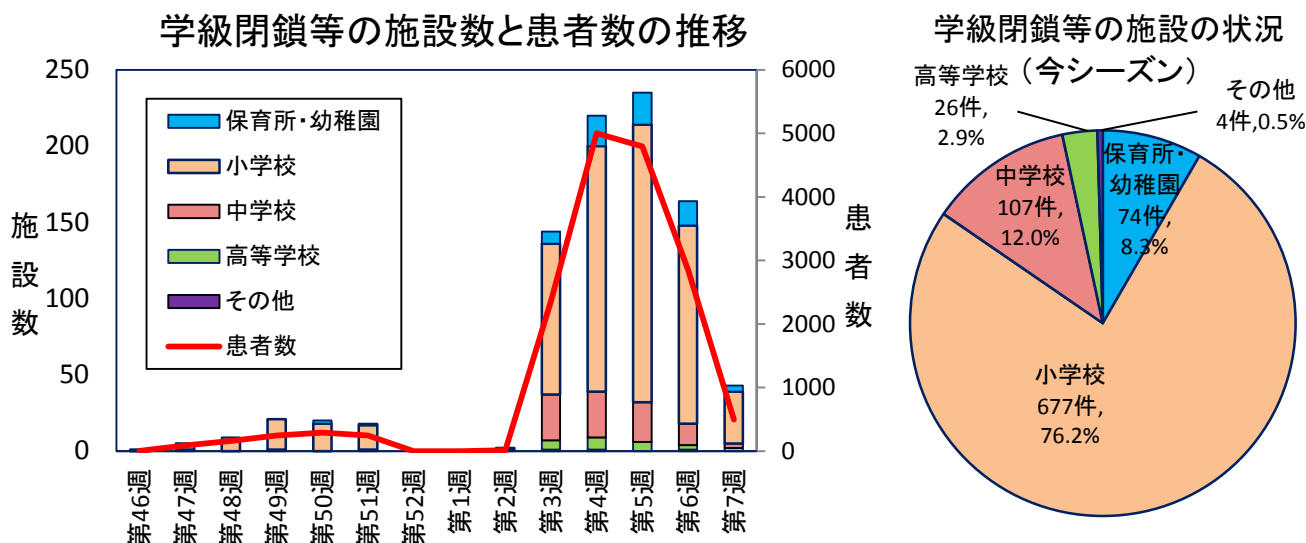
3 年齢層別集計: 第 7 週の患者年齢構成は、10 歳未満が全体の 48.8%、10 歳以上 15 歳未満が全体の 16.3%となり、15 歳未満が全体の 65.1%を占めています。また、60 歳以上は全体の 6.7%となっています。第 6 週までと比較して、15 歳未満が全体の占める割合は減少し、成人の占める割合が増加しています。

年齢層別患者割合



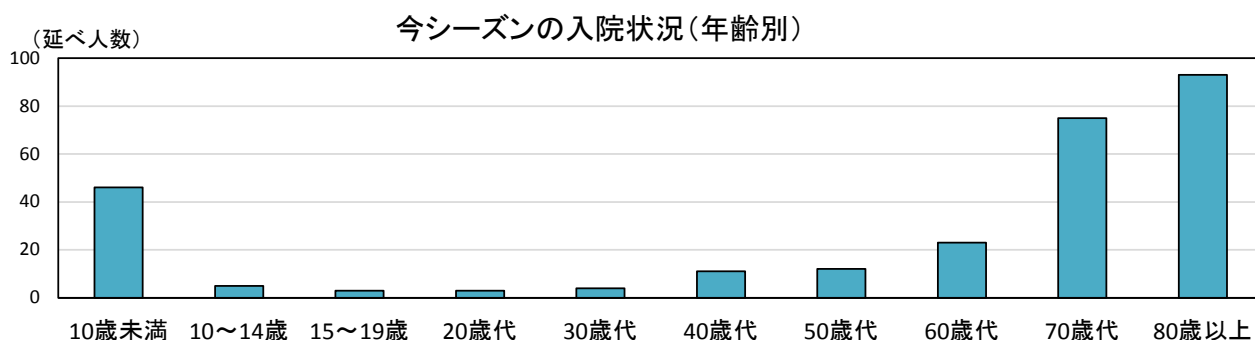
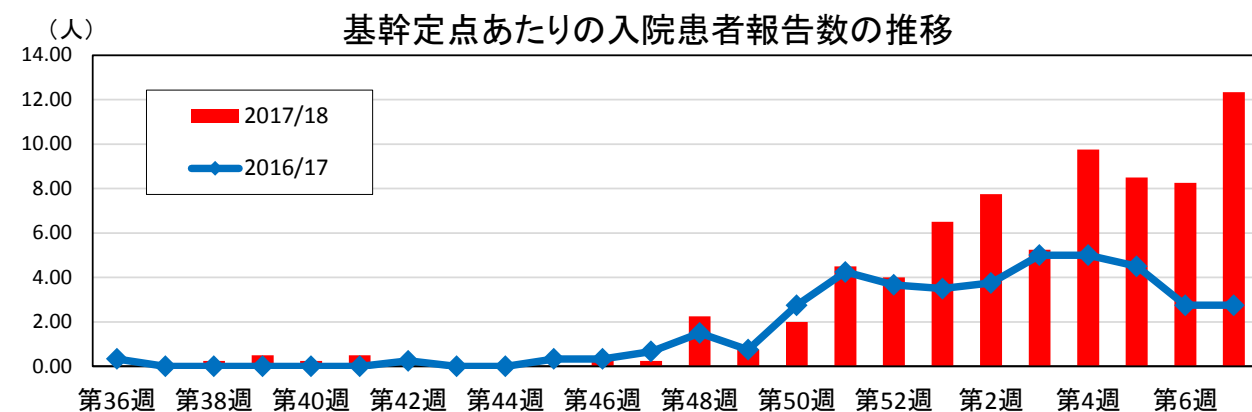
4 市内学級閉鎖等状況:学級閉鎖等の報告は、第7週で43件(休校1件、学年閉鎖2件、学級閉鎖40件)、患者報告数497人となり、減少に転じた第6週より減少しました。内訳は、保育所・幼稚園4件、小学校34件、中学校3件、高等学校2件です。

今シーズンの第7週までの報告は累計888件、患者数は延べ16,618人で、施設の割合は、保育所・幼稚園8.3%、小学校76.2%、中学校12.0%、高等学校2.9%、その他0.5%となっています。



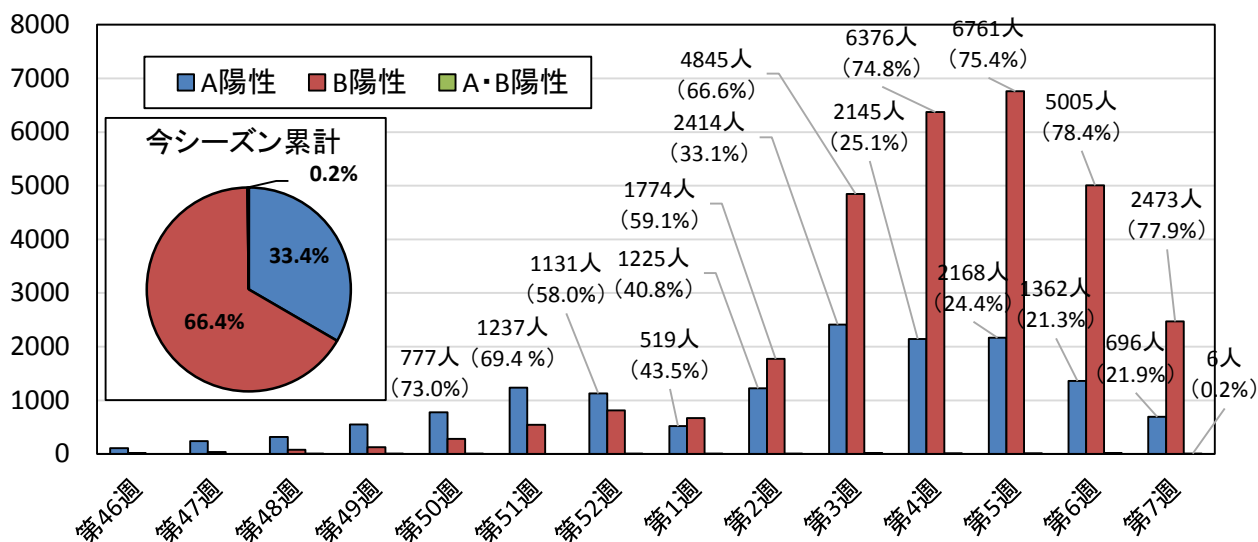
5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※3}におけるインフルエンザ入院患者は、第7週は37人の報告があり、累計275人となりました。うち、15歳未満が51人、60歳以上が191人となっており、小児と高齢者の報告が多くを占めています。

入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎やインフルエンザ脳症が疑われる入院患者は、第7週では4人の報告がありました(ただし、インフルエンザ脳症の発生届はありませんでした)。



6 迅速キット結果:今シーズンの初めはA型が多く報告されてきましたが、第50週頃よりB型の割合が増え始め、第1週で逆転しています。第7週の迅速キットの結果では、A型21.9%、B型77.9%、A・B型ともに陽性0.2%でした。今シーズン累計は、A型33.4%、B型66.4%、A・B型ともに陽性0.2%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{*7}からAH1pdm(48株)、AH3(39株)、B(山形系統)(81株)が分離・検出されており、B(山形系統)が多くを占めています。AH1pdmの分離・検出は減少していますが、AH3はシーズンを通じて一定数が分離・検出されています。全国の分離・検出も同様の傾向と考えられます^{*8}。

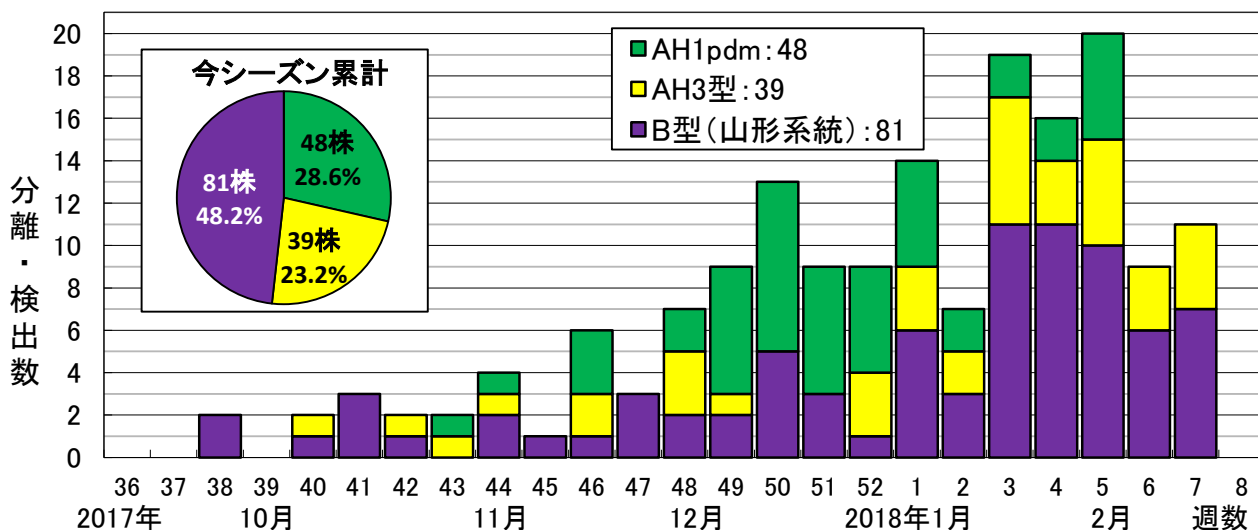
B型ウイルスの流行が早期に始まっていることから、A型ウイルスとの再感染や重複感染にも注意が必要です^{*4}。

^{*7} 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に17か所あります。うち、インフルエンザについては12か所にて採取されています。

^{*8} [週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数\(国立感染症研究所、2018年2月16日作成\)](#)

市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2018年2月21日現在)



8 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した 218 株、2 月 21 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、AH3 は、26 株のうち 23 株が 8 倍以上で、AH1pdm(98 株)と B(山形系統)(94 株)は、すべて 4 倍以内となっています。

これは、AH1pdm および B(山形系統)の流行株は「国内ワクチン製造株に抗原性が類似していた」、AH3 の分離株の 9 割以上が「国内ワクチン製造株に対する抗血清との反応性低下が認められ、ワクチン抗原と流行株の抗原性相違が推定される」とする国立感染症研究所の解析^{※9}と矛盾しないと考えられます。

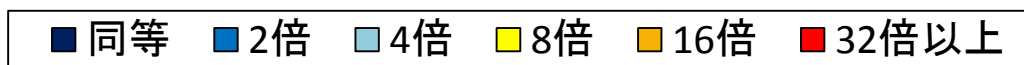
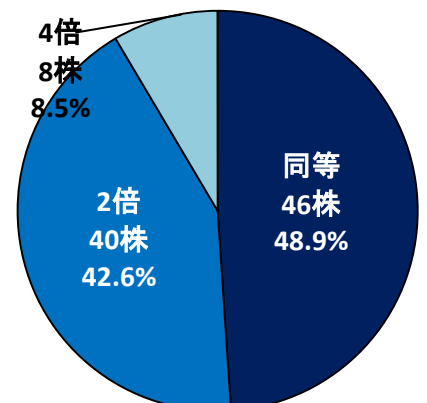
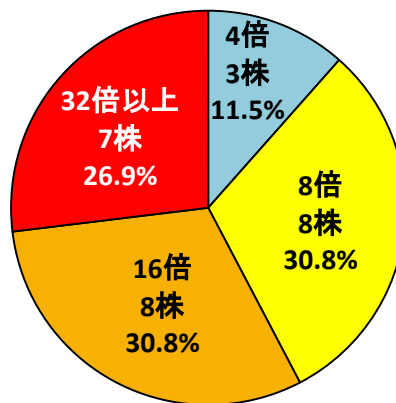
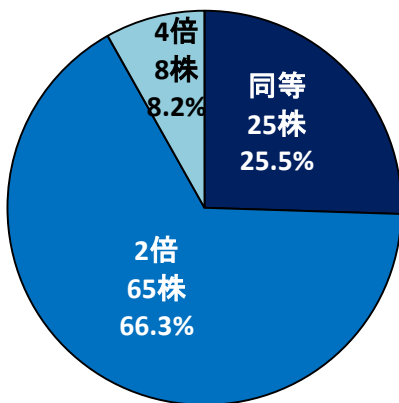
※9 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2018 年 2 月 19 日\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析

AH1pdm 抗原性解析(98 株)

AH3 抗原性解析(26 株)

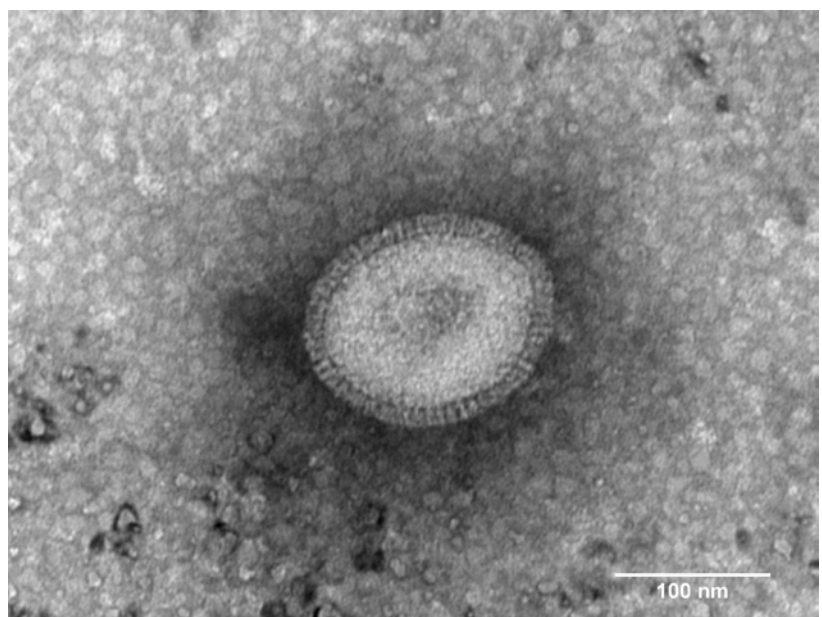
B(山形系統)抗原性解析(94 株)



インフルエンザウイルスの
電子顕微鏡写真(6 万倍)

B 型(山形系統)

撮影:
横浜市衛生研究所



※参考リンク 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)
全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045(671)2445